

沖縄県立埋蔵文化財センター所蔵









沖縄県内出土の舶載陶磁器展



期間：平成16年10月26日(火)～11月28日(日)

沖縄県立埋蔵文化財センター

磁陶載船

	1100	1200	1300	1400	
中国	南宋		元		
琉球	舜天王統		英祖王統		
中国産	 1 白磁 玉縁口縁碗 伊東後部遺跡		 12 白磁 口壳皿 舜山遺跡	 16 青磁 口折皿 舜山遺跡	
	 2 白磁 玉縁口縁碗 新里村遺跡	 8 青磁 柳指文皿 舜山遺跡	 13 白磁 口壳皿 新里村(東)遺跡	 11 白磁 薄手直口碗 新里村遺跡	
東南アジア産				 17 褐釉陶器 四耳壺 鹿野農用研遺跡	
日本産					
中国・沖縄の主な流れ	一一一五 金羅国 一一二七 南宋 建國 一一八七 舜天王即位と伝わる		一一八〇 英祖王即位と伝わる 一一八七 南宋 建國 一一九一 文永の役 一二一四 元 建國 一二七〇 英祖王即位と伝わる	一一三〇 中国 江西省・景德鎮の地産 一一八一 弘安の役 一二二九 南宋 建國 一二七四 文永の役 一二七〇 元 建國 一二七〇 英祖王即位と伝わる	一一三二 中山王即位、はじめて明に遣貨 一一六八 明 建國 一二三〇 察度、鴻巣按司から中山王となり南蠻へ
	平安時代	鎌倉時代		南北朝時代	

器の流れ

1400

1500

1500

1600

1600

明

王統

尚思紹王統(第一尚氏)

尚円王統(第二尚氏)

24 青磁 型造蓮弁文碗
慶長時代20 青磁 雷文茶碗
大正時代23 青磁 ラマ式蓮弁文碗
百景時代37 青磁 細蓮弁文碗
清田古窯跡61 白磁 灯明皿
上村遺跡19 褐釉陶器 水注
新里村遺跡35 黒釉陶器 天目茶碗
新里村遺跡21 青磁 蓮弁文碗
マツチのガマ58 白磁 拵高台皿
内實寺跡16 褐釉陶器 鉢
新里村遺跡33 褐釉陶器 四耳瓮
新里村遺跡67 青花 外反口縁皿
清田古窯跡64 青花 芙蓉手碗
青里城跡83 タイ産 半楕 土器菓
百景城跡87 タイ産 褐釉陶器 瓮
カンタン塚古窯跡92 ベトナム産 色絵 碗
清田古窯跡96 本土産 備前・焼締 溜鉢
大井寺跡

二二九 間人三六姓、差弁と伝わる
二二八九 竊賊、朝鮮(高麗)と通好する
二二八五 明の大坂、中山・南山間王に海船贈与
二二八三 山北王(昭光)に海船贈与
二二八〇 山南王(宗賢)に海船贈与

一四〇九 萬曆使入
一五七〇 南万留島の記録消失による
一五二九 萬里城守礼門の創建
一五〇八 首里城北殿の創建
一五〇一 五段を築く
一この頃から、沖縄に入ってくる陶磁器が減少し始める
一四九〇 バツ(タツ)と始めて交易
一四七七 首里城歌台門、久留門の創建
一四七〇 第一尚氏王統崩壊による
一四七〇 金丸(尚巴)即位
一四八三 マラッカへ使者を派遣
一四五九 首里城書庫が炎上
一四五七 万國津梁の鐘鐃造
一五彩の手法が中国・民衆で増え始める
一四三三 高麗・布里の乱が起こり、首里城炎上
一四二九 尚巴忠、三山城へ
一四二七 慶禮を起り安国山を築く
一四二二 パレンバン・ソンドナシとの交渉はじまる
一四二〇 尚思紹、シヤムに使者を遣わす
一四一六 尚巴忠、三王(寧安)を知り、
「餘臣王統派」第一條(詔勅)を
尚巴忠、武寧王を知ち父・思紹を王にたてる
シヤム(タイ)船渡来(文化交流)
一四〇四 開封使、はじめて来琉

一七〇九 萬曆使入
一五七〇 南万留島の記録消失による
一五二九 萬里城守礼門の創建
一五〇八 首里城北殿の創建
一五〇一 五段を築く
一この頃から、沖縄に入ってくる陶磁器が減少し始める
一四九〇 バツ(タツ)と始めて交易
一四七七 首里城歌台門、久留門の創建
一四七〇 第一尚氏王統崩壊による
一四七〇 金丸(尚巴)即位
一四八三 マラッカへ使者を派遣
一四五九 首里城書庫が炎上
一四五七 万國津梁の鐘鐃造
一五彩の手法が中国・民衆で増え始める
一四三三 高麗・布里の乱が起こり、首里城炎上
一四二九 尚巴忠、三山城へ
一四二七 慶禮を起り安国山を築く
一四二二 パレンバン・ソンドナシとの交渉はじまる
一四二〇 尚思紹、シヤムに使者を遣わす
一四一六 尚巴忠、三王(寧安)を知り、
「餘臣王統派」第一條(詔勅)を
尚巴忠、武寧王を知ち父・思紹を王にたてる
シヤム(タイ)船渡来(文化交流)
一四〇四 開封使、はじめて来琉

室町時代

安土桃山時代

目次

年表 目次 ごあいさつ

展示のあらまし	1
遺物出展遺跡分布図	2
12～13世紀の陶磁器の概要	3
12～13世紀の遺跡の様相	3
遺物紹介	4
13～14世紀の陶磁器の概要	7
13～14世紀の遺跡の様相	7
遺物紹介	8
舶載陶磁器の流れ	12
14～15世紀の陶磁器の概要	13
14～15世紀の遺跡の様相	13
遺物紹介	14
15～16世紀の陶磁器の概要	19
15～16世紀の遺跡の様相	19
遺物紹介	20
おわりに	31
遺物出展遺跡一覧	32
年代別遺物出品リスト	33
用語解説	35
引用文献	36
参考文献	37
協力者一覧	

凡例

- 1 本書は2004年10月26日（火）～11月28日（日）まで開催する「沖縄県内出土の舶載陶磁器展」の展示を補完するものとして編纂したものである。
- 2 本企画展は、沖縄県立埋蔵文化財センターが主催している。
- 3 本書の順序は、展示の各コーナーに沿って掲載している。
- 4 遺物の番号は、展示に併せて任意に割り当てたものである。
- 5 器物写真は、文章の内容を中心に掲載しており、一部掲載できなかったものもある。
- 6 特に産地が明記されていない場合は、全て中国産である。
- 7 提供していただいた写真には、巻末に芳名・機関名・刊行物名等を明記している。
- 8 本書に掲載されている写真の無断使用は固く禁ずる。

舶載陶磁器が語る琉球の対外関係と社会のようす ——企画展によせて——

周知のように、海外から琉球にもたらされた陶磁器はグスク時代遺跡を中心に
見つかっていて、当時の琉球が東アジアとのさまざまな関係を結びながら、
社会と文化を形づくっていったことを知る貴重な手がかりとなっています。

その多くは中国陶磁器ですが、広く朝鮮半島やタイ、ベトナムなどの東南
アジア地域産もあり、王国時代の交易、交渉、文化的関係などが広い範囲に
わたっていたことがうかがえます。同時にこれらの舶載陶磁器は、グスク時代を
中心とする琉球内部のようすや移り変わりを示すものでもあります。中国との
公式交易が展開される14世紀後半よりも二百年ほど前から、すでに琉球には
中国産白磁がもたらされています。いわゆる私貿易が存在していたと考えられて
いますが、それは中国沿岸地域との直接的関係なのか、それとも九州商人を
介するものなのかなど、それぞれの陶磁器の由来ひとつとってみても当時の
琉球の対外関係のようすを知る上で重要な研究課題があります。

また、琉球の外交文書集『歴代實案』に記載された対外関係記録とこれらの
舶載陶磁器の出土状況との対比によって、より鮮明な歴史像が描けるかも
知れません。

舶載陶磁器に示されるように、琉球はその地理的位置と歴史的環境から広く
海外諸地域と交流を続け、さまざまな分野で近隣諸国の文化を摂取し、さらに
独自性を加えて地域色豊かな文化を創造してきました。

当センターでは、このたび所蔵品のなかから主な舶載陶磁器を取り出し、
これを時代別に観覧できる企画展を開催することとしました。これを、わが
琉球の先人たちが東アジアに展開したさまざまな活動の具体的な証にふれると
ともに、琉球の歴史と文化および文化財へのいっそうの理解と関心を深めて
くださる機会にしていただければ幸いです。

平成16年10月
沖縄県立埋蔵文化財センター
所長 安里嗣淳

展示のあらまし

グスク時代の陶磁器をテーマとした『沖縄県内出土の舶載陶磁器展』は、これまで沖縄県教育委員会によって発掘調査され、沖縄県立埋蔵文化財センターが所蔵する資料（重要文化財「京の内出土の陶磁器」は除く）を県民に広く公開し、時代背景となっているグスク時代の歴史や文化への理解と関心を深めていただくことを主旨としている。

展示対象となっているグスク時代は、12世紀前後から16世紀頃までをさし、日本史上では平安時代後期から鎌倉・室町時代に相当する時代である。

当時の琉球は、農業と貿易で得た富を基盤として按司と呼ばれる支配者が各地でグスクを造営し、互いに貿易の利権や支配の拡大をめぐる争った国家形成の胎動期であった。各按司は、東アジア及び東南アジア等の周辺諸国との貿易によって得た陶磁器や鉄等の文物（富）を基盤に、農業生産力の向上に努めるとともに、鉄製武器などを入手して武力を強化し、勢力拡大に力を注いでいた。

各々のグスクを拠点として、按司によって支配されていた沖縄本島及び周辺諸島は、14世紀中頃になると北山：今帰仁城・中山：浦添城・南山：島添大里城の三つの小国家へと収斂されていった。いわゆる、三山の鼎立である。

三山の王たちは、互いに勢力争いをしながら、農業生産力の向上や海外貿易を振興することによって、経済的利益を得ただけでなく、新しい文物や技術、情報等を入手し、王としての権威づけをおこなった。約半世紀ほど続いた三山鼎立の後、琉球の統一を図ったのは南山の勢力下にあった佐敷グスクの按司・尚巴志であった。

このような経過を経て、琉球王国が形成され繁栄を誇っていたが、1609年の島津の侵攻によって、独立王国の歴史にピリオドが打たれた。

今回の展示においては、舶載陶磁器を受容する初期の段階にあたる12～13世紀から薩摩の侵攻（1609年）以前の15～16世紀までを対象とした。

そして、これらを流入期の12～13世紀、按司の抬頭が激しくなる13～14世紀、三山鼎立から統一王朝に至る14～15世紀、王国の安定期（隆盛期）の15～16世紀の4期に区分し、各期における生産地、器種構成や時代的変遷などに関する特徴的な遺物を展示している。

なお、生産地別では王国の繁栄を偲ばせる中国（南宋～明代）、朝鮮（高麗～李朝）、大和をはじめとして、ベトナム、タイ、ミャンマーと、東アジア～東南アジアの諸国との貿易などによってもたらされた陶磁器がある。

遺物出展遺跡分布図

ヤッチのガマ・カンシン原古墓群

はての浜

久米島

伊波後原遺跡

後兼久原遺跡

伊佐前原第一遺跡

拜山遺跡

喜友名貝塚

喜友名グスク

首里城跡

稲福遺跡

天界寺跡

阿波根古島遺跡

湯田古窯跡

円覺寺跡

宮古島

尻並遺跡

与那覇遺跡

嘉田地区古墓群

与那原遺跡

慶田崎遺跡

与那国島

西表島

慶来慶田城遺跡

上村遺跡

新里村遺跡

石垣島

12～13世紀の陶磁器の概要

原始時代（新石器時代）より沖縄では土器を製作・使用していましたが、12世紀頃になると中国の陶磁器がもたらされるようになります。

沖縄で出土する最も古い中国陶磁は白磁です。大きな玉縁状の口縁をもつ碗（玉縁口縁碗）で、高台削りが浅いものです。（遺物1・2）その他、口縁部が折れ曲がる碗などが見られます。（口折碗、遺物3）また、特異な例として定窯産の外面に蓮花文を施す碗や坏が確認されています。これらは首里城のみから出土していますが、12世紀～13世紀当時には首里城は建造されていないので、伝世品が後に首里城にもたらされたものと考えられます。

12世紀後半になると白磁とともに青磁が出土するようになります。中国の龍泉窯や同安窯を産地とするもので、龍泉窯系は内面に劃花文を施す碗（遺物6）や皿（遺物9）、同安窯系は内面に櫛描文を施す碗（遺物5）や皿（遺物7・8）などがあります。特に龍泉窯系の劃花文を施す皿は沖縄県内では久米島のはての浜表採品を含め、僅かしか確認されていません。

12世紀～13世紀の陶磁器は沖縄本島から先島諸島まで、様々な遺跡で確認されているものの出土量はまだまだ少なく、飛躍的に増大するのは14世紀半ば以降の三山時代になってからです。

12～13世紀の遺跡の様相

以上のような陶磁器を出土するこの時期の遺跡からは、沖縄で焼かれた土器はもちろん、徳之島産のカメヤキや長崎の滑石製石鍋とその転用品が出土するようになり、今まで土器しか使用していなかった人々の生活に大きな変化をもたらしたことが推測されます。

各遺跡から検出された遺構は、柱穴が整然と並び大型掘立柱建物跡（母屋）やそれに付随して小規模な掘立柱建物跡（高床式倉庫？）が確認されています。北谷町後兼久原遺跡では埋葬人骨も確認されています。長方形や長楕円形に掘られた土壇に、成人は仰向けで頭を東向きに、幼児はうつぶせで西向きに埋葬されていました。伊佐前原第一遺跡では埋葬人骨のほかに整然と列をなす植栽痕と見られるくぼみが確認され、畑跡と考えられています。

久米島のはての浜は海洋上に形成された砂丘の島です。この海底からは龍泉窯系や同安窯系の青磁や褐釉陶器ばかりが表採されています。これは12世紀～13世紀に近海で座礁した船の積み荷が長い年月をかけて移動し、はての浜に打ちあげられたものと考えられています。



1 白磁 玉縁口縁碗
伊波後原遺跡



2 白磁 玉縁口縁碗
新里村遺跡



3 白磁 しろまじ 口折碗 くちやわん
伊佐前原第一遺跡



參考資料
(写真提供：京都市埋蔵文化財研究所)



5 青磁 あおまじ 描描文碗 めいめいもんわん
稲福遺跡



參考資料
(写真提供：京都市埋蔵文化財研究所)



6 青磁 あおまじ 劃花文碗 くわはなもんわん
伊佐前原第一遺跡



參考資料
(写真提供：京都市埋蔵文化財研究所)



7 青磁 くしやまもん びん 柳描文皿
伊佐前原第一遺跡



参考資料
(写真提供：宮崎市歴史文化財研究所)



8 青磁 くしやまもん びん 柳描文皿
禰山遺跡



9 青磁 かさなもん びん 劃花文皿
はての浜



参考資料
(写真提供：宮崎市歴史文化財研究所)

13～14世紀の陶磁器の概要

13～14世紀の沖縄にもたらされた陶磁器の特徴としては、第一に褐釉陶器の登場があげられます。

この褐釉陶器の種類としては、肩の部分に小さな輪状の把手が4つある四耳壺（遺物17）、今で言うポットである水注（遺物19）、浅めの鉢（遺物18）があります。

青磁は、この時期になるとますます量が多くなります。その種類として、龍泉窯系の浮き彫りの手法でハスの花弁をかたどった鍋運弁文碗（遺物14・15）、口縁が外向きに折れ曲がった口折皿（遺物16）などに代表されます。また、少量ですが口縁部に刻みを入れ花弁状にかたどった無文輪花碗などもあります。

白磁は、この時期になると青磁よりも量的には少なくなります。その種類として、石垣市ピロースク遺跡出土の厚手で丸みのある碗を指標とした「ピロースクタイプ碗」（遺物10）、薄手で直線的な形の薄手直口碗（遺物11）、口縁部のみ釉が剥がれた口禿皿（遺物12・13）があります。

13～14世紀の遺跡の様相

13～14世紀になると、丘陵上に遺跡が立地することが多くなります。この時期の遺跡として、標高180mの高所に位置する大里村稲福遺跡や、柵列と考えられる遺構が確認された浦添市真久原遺跡や、大小の建物がセットで捉えられる読谷村吹出原遺跡などがあります。これらは、石積等は見られませんが、丘陵上の高所に位置することから、城塞の性格をもつグスク的な特徴を持ち始めています。

一方、先島諸島でも、城辺町高腰城跡や石垣市ピロースク遺跡、竹富町竹富島新里村遺跡なども集落遺跡で、やはり丘陵もしくは台地上に立地します。このように、沖縄本島および先島諸島で、集落が丘陵上に立地することになり、なんらかの社会的変化を反映した集落だと考えられます。



10 白磁 ピロースクタイプ碗Ⅱ
新里村遺跡



11 白磁 うす てしよこくち どん 薄手直口碗
新里村遺跡



12 白磁 白磁 66 口禿皿
拜山遺跡



13 白磁 白磁 66 口禿皿
新里村遺跡



参考資料

(写真提供：群馬県教育委員会)

14 青磁 鎬蓮弁文碗 (上2点)
しのびんべんせんわん
 稻福遺跡

15 青磁 鎬蓮弁文碗 (下2点)
 伊佐前原第一遺跡



16 青磁 くちあじわん 口折皿
 押山遺跡



17 かひゆうとうき 褐釉陶器 しじこ 四耳壺
 慶来慶田城遺跡



18 びつゆうとうき 褐釉陶器 鉢
新里村遺跡



19 びつゆうとうき 褐釉陶器 水注
新里村遺跡

舶載陶磁器の流れ



14～15世紀の陶磁器の概要

13世紀～14世紀の段階と比べてこの時期になると陶磁器の量と種類は爆発的に増えていきます。また、これまでの中国産の陶磁器に加えて、速く東南アジア諸地域でつくられた陶磁器が遺跡から出土するようになります。

種類が多くなる点として、例えば陶磁器の碗に見られる文様一つとっても、青磁では雷文帯（遺物20）、無鎊蓮弁文（遺物21）、ラマ式蓮弁文（遺物23）、型造蓮弁文（遺物24）、片切彫りの草花文、横線文、唐草文、人物像などが見られます。形を見ても白磁では口縁部を外反させたもの（遺物28）や内面を蛇の目釉剥ぎがされたもの（遺物30）と様々です。

また、この時期に染付と呼ばれるコバルト染料で絵付けされた陶磁器ももたらされます（遺物31）。特に14世紀の染付は元様式の染付とされ、15世紀代の明時代の染付とは作風が異なります。この元様式の染付は高級品とされ、遺跡から出土するのは首里城跡、勝連城跡、今帰仁城跡と大規模なグスクにほぼ限られます。これらの他に色絵（遺物32）や褐釉陶器（遺物33）、黒釉陶器（遺物35）、泉州窯系磁器（遺物26）などが出土していることから大量、且つ多種多様な陶磁器が持たされたことがわかります。このことから中国をはじめとした東南アジア各地へと海外交流が拡大したことを示していると言えるでしょう。

14～15世紀の遺跡の様相

14～15世紀にかけては13～14世紀の段階で多くつくられたカメヤキの生産が衰退し、土器も減少傾向にあります。これに反比例して陶磁器が多くもたらされますが、これらが最も多く出土する遺跡が「グスク」です。グスクは人々を統率する「按司」と呼ばれる首長の拠点であるとされ、琉球列島の各地に形成されるようになりました。グスクには様々な形態がありますが、一般に丘の周囲に石積みをめぐるし、内部に平坦面を造成して建物を建てました。これらの按司が今帰仁城を本拠する北山、浦添城を本拠する中山、大里城を本拠とする南山の3つの勢力にまとまり、互いに争います。その結果、1429年に尚巴志によって一つにまとまり、さらに1458年の金丸によるクーデターによって沖縄本島内の争いは一段落します。また、集落遺跡からも多くの陶磁器が出土することから陶磁器の需要はかなり広がったことを示していると言えます。



20 青磁 らいもん さいわん 雷文茶碗
天界寺跡



21 青磁 むしゅう げんべんもん 無銘蓮弁文碗
ヤッチのガマ



23 青磁 しやん べん ぶん ばん ラマ式蓮弁文碗
首里城跡



24 青磁 あま ぐさ けん べん ぶん ばん 型造蓮弁文碗
慶田崎遺跡



26 泉州窯系磁器 直口縁皿
首里城跡



28 白磁 外反口縁碗
首里城跡

参考資料

(写真提供：沖縄町教育委員会)



30 白磁 外反口縁皿
湧田古窯跡



31 青花^{あざはな}盤・大合子^{おほごころ}など
首里城跡



首里城跡文様

(出典：『陶磁器絵付文様事典』柏倉啓)

参考資料



八重文大合子



32 色絵^{いろえ}外反口縁碗^{おほごころ}
首里城跡



参考資料



33 かつゆうとうき 褐釉陶器 しじこ 四耳壺
新里村遺跡



35 こくゆうとうき 黒釉陶器 てんめくちawan 天目茶碗
稲福遺跡

15～16世紀の陶磁器の概要

14世紀後半の三山時代から琉球は、中国との冊封関係による朝貢貿易を明朝の海禁政策という環境下で有利に展開し、さらに東アジア諸国との交易を発展させてきました。

そのために舶載陶磁器も15世紀までかなりの量が琉球にもたらされました。中国以外の産地には、日本・朝鮮・タイ・ベトナム・ミャンマー・などがあります。また陶磁器の種類もバラエティーに富み、碗・皿といった小型の食器以外にも、盤（遺物48・81）や酒会壺（遺物50・51）などの大型の器が出土します。さらに青磁の将棋の駒（遺物55）や、世界的にも珍しい紅釉の水注があります。染付（遺物91）の割合が増加することもこの時期の特徴といえます。

16世紀以降になるとヨーロッパ諸国が東南アジアへ進出し始め、また中国明朝の弱体化にもなって海禁が効力を失ってきます。このようなことが原因で中継貿易が成立しにくくなり、沖縄と他国との交易も減ってきました。そして舶載陶磁器の数も次第に少なくなっていくます。

15～16世紀の遺跡の様相

琉球国王の居城であった首里城では、大規模な城壁・城門の造営がおこなわれ、首里城を取り囲む城壁が完成しました。また首里城の周辺でも天界寺・円覚寺といった寺院や、各種の建造物が造られました。

久米島にはヤッチのガマおよびカンジン原古墓群と呼ばれる、近世～近代の大規模な墓地があります。ここからは、厨子壺とよばれる遺骨を納める大きな容器と、その中から1,000体以上の人骨が見つかりました。これとともに死者を葬る儀式などに使ったと考えられる陶磁器が見つかっています。



37 青磁 さいなんぶんもん 細蓮弁文碗
湧田古窯跡



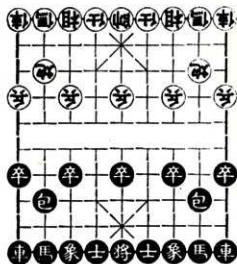
51 青磁 しゅかいこ 酒会壺(身)
首里城跡



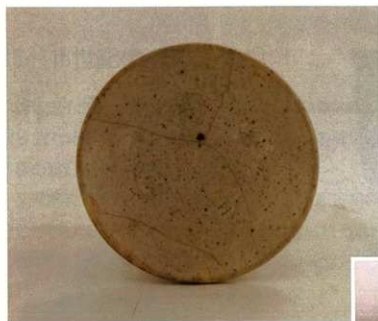
参考資料



55 青磁 駒
首里城跡



象棋(チェン)の駒の配置
資料は黒の駒『包』
または赤の駒『炮』
(出典:『解題守史 資料編2 中の7 解題の氏名』)



56 白磁 扶高台皿
円覚寺跡



61 白磁 ビロウチヤウ 灯明皿
上村遺跡



64 青花 アヲシロ 芙蓉手碗
首里城跡



67 青花 外反口縁皿
びい ぼん ころ えん ざん
 湧田古窯跡



73 瑠璃釉磁器 蓋
るりゆうじき ぶた
 首里城跡



ツル型



果実型



カモ型



参考資料

(出典：『大化讓紀事 第6巻』)



参考資料

(写真提供：熊本県教育委員会)



参考資料

(写真提供：熊本県教育委員会)

80 三彩 水注^{すいじゆう}
首里城跡



83 タイ産 半線 土器蓋^{はんせん どきふた}
首里城跡



87 タイ産 カフ ヨウ トウ キ 褐釉陶器 ツボ 壺
カンジン原古墓群



92 ベトナム産 いろ え 色絵 ひん 碗
湧田古窯跡



94 朝鮮産 象嵌青磁 皿(左)・瓶(右)
首里城跡



96 本土産 備前焼 摺鉢
天界寺跡



36 青磁 型造直口碗
天界寺跡



42 青磁 八角皿
首里城跡



38 青磁 波頭文碗
首里城跡



43 青磁 稜花皿
喜友名貝塚・喜友名グスク



39 青磁 直口碗
首里城跡



44 青磁 直口皿
与那原遺跡



40 青磁 幅広高台碗
首里城跡



45 青磁 菊花皿
湧田古窯跡



41 青磁 外反皿
首里城跡



46 青磁 八角杯
慶未慶田城遺跡



47 青磁 馬上杯
ヤツチのガマ



54 青磁 香炉
与那覇遺跡



48 青磁 鈔縁盤
慶未慶田城遺跡



56 白磁 口折碗
尻並遺跡



49 青磁 鉢
首里城跡



57 白磁 直口碗
天界寺跡



50 青磁 酒会壺 蓋
首里城跡



59 白磁 外反皿
天界寺跡



52 青磁 大型花瓶
首里城跡



60 白磁 菊花皿
湧田古窯跡



63 青花 端反碗
嘉田地区古墓群



71 色絵 外反碗
首里城跡



65 青花 蓮子碗
上村遺跡



74 瑠璃釉磁器 梅瓶
首里城跡



66 青花 腰折碗
慶末慶田城遺跡



76 褐釉陶器 壺
カンジン原古墓群



68 青花 萼筒底皿
上村遺跡



77 褐釉陶器 搥鉢
天界寺跡



69 青花 玉壺春瓶
首里城跡



79 翡翠釉陶器 菊花外反皿
天界寺跡



81 三彩 盤
首里城跡



88 タイ産 褐釉陶器 瓶
ヤッチのガマ



82 鉄絵陶器 酒会壺
首里城跡



89 タイ産 無釉陶器 壺
ヤッチのガマ



85 タイ産 鉄絵陶器 皿
湧田古窯跡



90 タイ産 無釉陶器 鉢
首里城跡



86 タイ産 白褐釉陶器 水滴
天界寺跡



91 ベトナム産 青花 水注
首里城跡

おわりに

今回の展示は『沖縄県内出土の舶載陶磁器展』というテーマで、当センター所蔵の資料を紹介してきました。これまでみてきたように沖縄県内で出土する舶載陶磁器は12～13世紀代のもは中国（南宋）産が確認され、出土量も多くはないのですが、13世紀以降では時代が下るに従い、生産地および出土量ともに増加していきます。特に琉球王国が安定する時期である15～16世紀代には多量の舶載陶磁器がグスクを中心として集落遺跡から出土しています。

近年、注目されている資料に、海岸より採集される陶磁器があります。これらの陶磁器は交易もしくは何らかの要因により船に積載されたものが、座礁や難破などによって海洋に投げ出されたものであると考えられています。そのため交易だけでなく、文献に現れない交流解明の手がかりの一つになるものと考えられております。

今回は時期を12～16世紀と設定したため、1609年の薩摩侵攻以降の近世に相当する時期に関しては、出土する陶磁器の様相および琉球王国の状況が変化するため対象としませんでした。1609年は日本史では近世初期にあたり、中世と近世の境にありますので、ひとつの画期として捉えております。次回の舶載陶磁器を扱う企画展には17世紀以後のものをまとめた内容を考えております。17世紀以後の舶載陶磁器は、中国（清）産のものをもってみても江戸や大坂から出土する資料とは様相が異なっております。また、17世紀には沖縄においても舶載陶磁器を模範としながら湧田古窯などで陶器の生産が始まります。

17世紀以降の舶載陶磁器についても特徴的なものが多くありますので、次回の陶磁器に関する企画展も期待していただきたいと考えております。

遺物出展遺跡一覧

遺跡名	所在地	種別	主な時代	主な遺構	特記事項
1 阿波根古島遺跡	糸満市阿波根	集落	グスク～近世	集石群、方形石敷、石列	14・15世紀には、阿波根グスクの集落として位置づけられる。埴輪陶磁、三形の人形などが出土。
2 伊住前原第一遺跡	宜野湾市伊住	散布地	グスク時代	独立柱建物跡、埋葬遺構、列状ピット群、溝状遺構、炉跡、ピット群	30枚の埴輪層があり、上位埴輪土とする層より上位の層から栽培植物が検出。
3 伊波後原遺跡	石川市宇伊波	集落跡	貝塚時代後期～グスク時代	建物遺構、埋蔵人骨	建物跡は、鍛冶工房跡とされている。
4 稲福遺跡	大里村字稲福	集落跡	グスク時代	土坑、柱穴	
5 上村遺跡	竹富町字西表	集落跡	中世～近世	サング集積遺構、炉跡	鯨油関連遺構が確認できた。
6 押山遺跡	浦添市西原及び西原町森川	集落?、御殿、陣地跡	グスク時代		
7 円覚寺跡	那覇市首里当蔵	寺院跡	グスク時代～近代	石敷遺構、石畳、建物跡、庭園跡、溝、石燈	
8 高田地区古墓群	与那国町字与那国野武原	その他の墓	近世～近代	墓	近代の埋葬人骨を確認。県内では例のない肥前系土器が出土。
9 喜友名貝塚	宜野湾市喜友名	貝塚	貝塚時代	竪穴住居	
10 喜友名グスク	宜野湾市喜友名	グスク	グスク～現代	集石遺構、集石土坑、溝状遺構、豚小庭跡、砂輪小庭跡、ピット群	
11 後兼久原遺跡	北谷町桑江字兼久原・小掘原	集落跡	グスク時代	平地住居跡、高床式倉庫跡、竈、炉、貯蔵穴、砂鉄貯蔵穴、埋蔵人骨	12世紀の散開溝状の墓が、敵の痕跡とともに明確に検出。
12 慶末慶田城遺跡	竹富町字西表	集落	中世～近代	方形石組遺構、石敷・階段状遺構、柱穴群、集石遺構、屋敷囲い石垣	西表島における中世・近世にかけての広範囲の遺跡で、集落の規模・形態を把握することができる。
13 慶田崎遺跡	与那国町字久部良	集落跡	中世		
14 首里城跡	那覇市首里当蔵	城館	中世	井戸、石畳、石壇、石階段、排水溝、上水道石管、水槽、石組遺構、基礎遺構、礎石列、造成層、方形石組遺構	東の内跡出土品が、国の重要指定文化財となっている。
15 灰並遺跡	平良市宇西里	集落跡	近世・近代	土坑墓、炉跡、柱跡、土坑、石組遺構	伊跡、鉄滓、羽口、鉄鍋などの鍛冶関連遺構・遺物。
16 新里村遺跡	竹富町字竹富	集落跡	グスク～近世	独立柱建物跡、土留め石積、屋敷囲いの石積、柱穴、土坑、魚甲墓、石積方形墓	溝石版石鍋板土器の出土。村には道がほとんどなく、屋敷が通用門で隔ばれた村落形態と考えられる。
17 天界寺跡	那覇市首里金城町	宗教遺跡	沖縄貝塚時代後期～近代	ウマ埋葬遺構、ヤコウガイの蓋集中部、階段状遺構、石敷遺構、土坑、瓦礫集中遺構、円形遺構、石列遺構、石垣遺構、柱穴群	
18 与那原遺跡	与那国町字祖内	集落跡	中世	ピット群、土坑群、排水溝	
19 はての浜	久米島町	遺物散布地	グスク初期		砂丘北側の溝底に遺物が散布する。
20 ヤツチのガマ・カンジン原古墓群	真志川村字上江洲	その他の墓・包蔵地	古代～近代	石積・石列・区画石積・建物礎石・井戸様遺構・焼土	大規模な石積とそれに伴う石列遺構を複数確認。人骨が1,000体以上。
21 湧田古窯跡	那覇市泉崎	生産遺跡	近世	瓦列遺構、長方形石組遺構、石積・レンガ・セン様遺構、井戸、竈体、土取溝跡、張床土坑、ピット群、方形瓦敷遺構、廃棄土坑、石列遺構	皿地区（現聖観音）の集中遺構で埴輪と一緒に、染付、唐摩焼、沖縄産無釉・施釉陶器が一括して出土。銘入りの沖縄産施釉陶器も出土。
22 与那朝遺跡	下地町字与那朝	集落跡	近世		集落の壺・皿などのミニチュア土器。

・遺跡は五十音順で掲載している。また、遺跡の所在地は調査当時の市町村名で記載している。

年代別遺物出展リスト

年代	産地	製品	器種	遺物番号	遺跡	
12c~13c (9点)	中国	白磁	碗	1	伊波後原遺跡	
				2	新里村(西)遺跡	
				3	伊佐前原第一遺跡	
				4	首里城跡(下之御庭ほか)	
		青磁	碗	5	稲福遺跡	
				6	伊佐前原第一遺跡	
				7	伊佐前原第一遺跡	
				皿	8	禪山遺跡
					9	はての浜
13c~14c (10点)	中国	白磁	碗	10	新里村(西)遺跡	
				11	新里村(西)遺跡	
			皿	12	禪山遺跡	
		青磁	碗	13	新里村(東)遺跡	
				14	稲福遺跡	
				15	伊佐前原第一遺跡	
		褐釉陶	皿	16	禪山遺跡	
				17	慶来慶田城遺跡	
				鉢	18	新里村遺跡
水注	19	新里村(東)遺跡				
14c~15c (16点)	中国	青磁	碗	20	天界寺跡(西区)	
				21	ヤッチのガマ	
				22	慶来慶田城遺跡	
				23	首里城跡(管理用道路)	
				24	慶田崎遺跡	
				皿	25	阿波根古島遺跡
				26	首里城跡(下之御庭ほか)	
		白磁	水注	27	稲福遺跡	
				碗	28	首里城跡(下之御庭ほか)
				皿	29	稲福遺跡
		染付	盤など	30	湧田古窯跡(行政棟)	
				31	首里城跡(下之御庭ほか)	
		色絵	碗	32	首里城跡(城郭南側下)	
				33	新里村遺跡	
褐釉陶	壺	34	後兼久原遺跡			
		茶入	35	稲福遺跡		
黒釉陶	碗	36	天界寺跡(西区)			
15c~16c (62点)	中国	青磁	碗	37	湧田古窯跡(行政棟)	
				38	首里城跡(下之御庭ほか)	
				39	首里城跡(管理用道路)	
				40	首里城跡(下之御庭ほか)	
				41	首里城跡(下之御庭ほか)	
				42	首里城跡(下之御庭ほか)	
				43	喜友名貝塚・喜友名グスク	
			皿	44	与那原遺跡	
				45	湧田古窯跡(行政棟)	
				46	慶来慶田城遺跡	
			杯	47	ヤッチのガマ	

15c~16c (62点)	中国	青磁	盤	48	慶来慶田城遺跡	
			鉢	49	首里城跡(下之御庭ほか)	
			酒会壺	50	首里城跡(下之御庭ほか)	
				51	首里城跡(下之御庭ほか)	
			瓶	52	首里城跡(下之御庭ほか)	
			53	首里城跡(下之御庭ほか)		
			香炉	54	与那覇遺跡	
		胸	55	首里城跡(右掖門)		
			碗	56	尻並遺跡	
				57	天界寺跡(東区)	
		皿	58	円覚寺跡		
			59	天界寺跡(西区)		
		白磁	皿	60	湧田古窯跡(行政棟)	
			器台	61	上村遺跡	
		染付	碗	62	首里城跡(右掖門)	
				63	嘉田地区古墓群	
				64	首里城跡(右掖門)	
				65	上村遺跡	
			皿	66	慶来慶田城遺跡	
				67	湧田古窯跡(行政棟)	
			68	上村遺跡		
			瓶	69	首里城跡(練門大道)	
			その他	70	首里城跡(下之御庭ほか)	
			色絵	碗	71	首里城跡(城の下)
		皿		72	天界寺跡(東区)	
		瑠璃釉磁	蓋	73	首里城跡(下之御庭ほか)	
			瓶	74	首里城跡(下之御庭ほか)	
		紅釉磁	水注	75	首里城跡(下之御庭ほか)	
			壺	76	カンジン原古墓群	
		褐釉陶	搦鉢	77	天界寺跡(西区)	
			鉢	78	天界寺跡(西区)	
		翡翠釉陶	皿	79	天界寺跡(東区)	
			三彩	水注ほか	80	首里城跡(下之御庭ほか)
		盤		81	首里城跡(下之御庭ほか)	
		タイ	鉄絵陶	壺	82	首里城跡(下之御庭ほか)
				蓋	83	首里城跡(奉神門)
			鉄絵陶	壺	84	天界寺跡(東区)
				皿	85	湧田古窯跡(地下駐車場)
			白褐釉陶	水滴	86	天界寺跡(東区)
				褐釉陶	壺	87-1・2
			瓶		88	ヤツチのガマ
			無釉陶	壺	89	ヤツチのガマ
				鉢	90	首里城跡(城の下)
			ベトナム	染付	水注	91
		色絵		碗	92	湧田古窯跡(行政棟)
		ミャンマー	褐釉陶	壺	93	首里城跡(下之御庭ほか)
皿など	94			首里城跡(下之御庭ほか)		
朝鮮	象嵌青磁	瓶	95	首里城跡(下之御庭ほか)		
		搦鉢	96	天界寺跡(西区)		
日本	備前・焼締	搦鉢	96	天界寺跡(西区)		

用語解説

磁器（じき）

素地は白色で、半透明で吸水性のない硬い焼き物をさす。陶石を原料とし、長石・石英などを配合して素地とする。素焼きしたあとに施釉し、1100～1500度の高温で焼成する。中国漢代末に始まったとされ、宋代に完成された。

陶器（とうき）

広義では磁器や石器、または土器をも含めた焼き物全般の総称に使われる場合が多いが、狭義では素地が十分焼き締まらず吸水性があり、不透明な焼き物に限定して使う。粘土を主原料として焼成し釉薬をかけるものと、かぜずに焼き締めたものがある。磁器との境界は連続的であるため明確な区別はない。磁器に近いものから硬質陶器、精陶器、粗陶器に分類する。

また、原料により石炭質陶器、白磁石質陶器、長石質陶器などに分けられる。

紅釉（こうゆ・こうゆう）

銅を発色剤に使用し高火度で焼成された磁器。銅紅釉、辰砂釉とも呼ばれる。還元焼成により鮮紅色に発色する。中国では宋代に始まったとされるが遺品は元代が初出である。景徳鎮窯が主に宮廷御器を焼造し、明・清代を通じて官窯の特技として製作された。

瑠璃釉（るりゆ・るりゆう）

酸化コバルトを長石に混ぜた着色料を使用した色釉。高火度で焼成すると青く発色する。ほぼ全面に施釉した場合に称される。主に磁器に用いられることが多い。日本や沖縄で出土する瑠璃釉の多くは景徳鎮及び中国南部の徳化窯で生産されたものである。

褐釉（かつゆ・かつゆう）

広義では鉄分を呈色剤として褐色になった陶器も含まれるが、陶磁史からみた場合には、中国漢代に栄えた酸化鉄を呈色剤とする低火度鉛釉のことをさし、その陶器を褐釉陶器と称する。沖縄で出土する褐釉陶器は、中国南部の広東省やタイで生産された12世紀以降の資料である。

青磁（せいじ）

磁器の一種。素地と釉薬のなかに含まれる鉄分が、還元焼成によって青く発色した磁器。中国の殷周・戦国時代の灰釉陶器がその源流とされ、後漢三國時代の浙江省方面で製作された古越磁が最初の原始的青磁であるとされる。日本や沖縄で出土する青磁の多くは、元から明代にかけて浙江省の龍泉窯及びその周辺で製作されたものである。

※還元焼成…炭素が多く酸素が欠乏している不完全燃焼の炭。炭素に富み完全燃焼の場を酸化炭という。

白磁（はくじ）

磁器の一種。白地の素地に透明釉をかけ、高温で焼成した磁器。白磁の起源についてはまだ明確にはされていないが、その起源は灰釉陶器や古磁器とされる。原始的な白磁が誕生したのは、6～7世紀の頃から初唐とされる。沖縄で出土する白磁には、種に定産で製作されたものが見られるが、大部分は景徳鎮や中国南部の初窯及び徳化窯を産地とする。

三彩（さんさい）

素地に直接、緑・茶・白・藍などの低火度釉を掛けて焼いた軟陶。必ずしも三色とは限らず、2～4色のものも多い。中国では唐代に盛んとなるが、宋・遼などにもあり、日本では奈良時代に焼かれていた。また、エジプトやペルシアでも古くから行われていた。

青花（染付）（せいいか）〈そめつけ〉

磁器の一種。いわゆる染付で、中国では一般的に青花（青花白磁・釉裏青）と称する。白色の素地にコバルトを含む呉須により絵付けを施したあとに、透明釉をかけて焼成する。還元焼成により白地に青い文様が浮かび上がる。中国でのコバルトの使用は唐時代に見られるが、釉下に絵付けする手法を用いたのは宋時代以降であり、元時代に完成する。青花の主な生産地として景徳鎮及び周辺諸窯があげられるが、明・清代には中国南部の各地に粗製の青花を生産する民窯が出現する。また、周辺諸国では中国の影響をうけて、ベトナムでは安南染付が、朝鮮では李朝初期から染付の製作が開始される。

※コバルト…呉須などの天然の鉱物などに含まれる化合物で、青の材料として用いられる。

※呉須…コバルト化合物を含む天然の鉱物をさす。これを細粉状にして水に溶かし、文様を描いたあとに上から透明釉をかけて焼き上げると藍色に発色する。

色絵（赤絵）（いろえ）〈あかえ〉

赤を主調とする多彩の上絵付。赤は酸化第二鉄（紅州）、緑は主に酸化銅でクロムを配合、紫はマンガン、藍は酸化コバルト等を用いる。赤だけは他の絵の具と違い不透明であり、750～800度位で焼き付けられる。

用語解説

定窯（ていよう）

中国河北省白陽県洺磁村に窯跡のある宋代の名窯。戦国（9世紀頃）に開窯して白磁の秀作を産出。五代・北宋・金代まで続いた。その産窯は判然としないが、元代まで続いたかもしれない。白磁の他、黒磁・柿釉磁・糖落し文様の磁器や磁胎陶・灰胎陶も初期の段階で焼いていたようである。

龍泉窯（りゅうせんよう）

中国の代表的な青磁窯で、窯は浙江省龍泉県一帯に広く分布しているが、さらにその系統の窯が浙江省南部～福建省南部まで広域に散在する。北宋中葉（11世紀半ば）に越州窯系の窯として発足、南宋代に越青磁を焼いて名実ともに中国第一の青磁窯となり、元・明時代には天龍寺青磁を製して大きな展開をげた。

同安窯（どうあんよう）

中国福建省の同安県上埔村・許坑村にある青磁の古窯。開窯・産窯についての詳しい資料はないが、12世紀には龍泉窯系の青磁窯として開かれ、日本では赤光青磁と呼ばれる粗製青磁を13世紀頃に景産し、輸出した。

海禁（かいきん）

下海通蕃之禁の略。一般中国人の私的な海外渡航や海上交易を禁止した政策。

冊封（さつほう）

中国が周辺諸国の王に爵位・称号を授けること。中国は冊封を受け入れた国に対し、進貢貿易（周辺諸国からの貨物に対し、中国が物資を与える）を認めた。

伝世品（でんせいひん）

美術品などで、制作以来愛蔵され贈賞されて伝えられたきたもの。

象棋（チュンジー）

本土の特徴と読み方は同じだが、盤上で駒の置き方は、線と線の間の中にも置くことや、相手の駒を取っても再度使うことができないなど、西洋のチェスと似ている。

その由来は諸説あるが、漢・楚の二國が樂にとって代わろうとした頃、漢軍の総帥である韓信が対陣中で敵士達の志気を鼓舞するために考え出されたのとするのが有力である。

引用文献

1. 沖縄県立埋蔵文化財センター 2001: 『特別企画展 首里城京の内展-貿易陶磁からみた大交易時代-』沖縄県立埋蔵文化財センター
2. 下中成人 1984: 『増強 やきもの辞典』平凡社

参考文献

1. 金城亀彦・編 1990: 『阿波根古島遺跡-那覇・糸満線道路改良工事に伴う緊急発掘調査報告- 沖縄県文化財調査報告書 第96集』 沖縄県教育委員会
2. 富路清乃・編 2001: 『伊佐前原第一遺跡-宜野湾北中城線(伊佐~普天間)道路改築事業に伴う緊急発掘調査報告書(Ⅱ)- 沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第4集』 沖縄県立埋蔵文化財センター
3. 当真嗣一・編 1975: 『石川市伊波後原遺跡調査概報』 『南島考古 第4集』 沖縄県古学会
4. 当真嗣一・編 1983: 『稲福遺跡発掘調査報告書(上部遺跡地区)』 沖縄県文化財報告書 第50集』 沖縄県教育委員会
5. 大城繁・編 1991: 『上村遺跡-重要遺跡確認調査報告- 沖縄県文化財調査報告書 第98集』 沖縄県教育委員会
6. 屋間味政光・編 1987: 『洋山遺跡-沖縄自動車道(石川~那覇間)建設工事に伴う緊急発掘調査報告書(5)- 沖縄文化財調査報告書 第83集』 沖縄県教育委員会
7. 山本正昭・編 2002: 『円覚寺跡-遺構確認調査報告書- 沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第10集』 沖縄県立埋蔵文化財センター
8. 片桐千亜紀・編 2004: 『与那国島 島田地区古倉野-島田地区ばら整備事業に伴う緊急発掘調査報告書- 沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第21集』 沖縄県立埋蔵文化財センター
9. 比嘉路・編 1999: 『番友名円塚・番友名グスク-宜野湾北中城線(伊佐~普天間)道路改築事業に伴う緊急発掘調査報告書(1)- 沖縄県文化財調査報告書 第134集』 沖縄県教育委員会
10. 片桐千亜紀・編 2004: 『後兼久原遺跡-米軍送込管移設に係る緊急発掘調査報告書- 沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第22集』 沖縄県立埋蔵文化財センター
11. 金城亀彦・編 1997: 『西表島 鹿来慶田遺跡-重要遺跡確認調査- 沖縄県文化財調査報告書 第113集』 沖縄県教育委員会
12. 金武正紀・編 1985: 『慶田遺跡-久保良小学校校体育館建設工事に伴う緊急発掘調査報告- 与那国町文化財調査報告書 第1集』 与那国町教育委員会
13. 山本正昭・編 2003: 『陵門大道跡-首里城跡守礼門周辺地区発掘調査報告書- 沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第13集』 沖縄県立埋蔵文化財センター
14. 片桐千亜紀・編 2003: 『首里城跡-右衛門及び周辺地区発掘調査報告書- 沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第14集』 沖縄県立埋蔵文化財センター
15. 盛本隆・編 2001: 『首里城跡-管理用道路地区発掘調査報告書- 沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第1集』 沖縄県立埋蔵文化財センター
16. 羽方誠・編 2004: 『首里城跡-城の下地区発掘調査報告書- 沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第18集』 沖縄県立埋蔵文化財センター
17. 西紀章・編 2001: 『首里城跡-下之御座跡・物居座跡・運米門跡・海刻門跡・真福門跡・木曳門跡発掘調査報告書- 沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第3集』 沖縄県立埋蔵文化財センター
18. 知念隆博・編 2004: 『首里城跡-城郭南側下地区発掘調査報告書- 沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第19集』 沖縄県立埋蔵文化財センター
19. 大城繁・編 1998: 『首里城跡-御座跡・奉神門跡の遺構確認調査報告- 沖縄県文化財調査報告書 第133集』 沖縄県教育委員会
20. 羽方誠・編 2003: 『尻並遺跡-那覇地方裁判所平良支部建て替えに伴う発掘調査- 沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第15集』 沖縄県立埋蔵文化財センター
21. 島袋洋・編 1990: 『新里村遺跡-竹富島一環道路建設工事に伴う緊急発掘調査報告書- 沖縄県文化財調査報告書 第97集』 沖縄県教育委員会
22. 島袋洋・編 2001: 『天界寺跡(1)-首里社館地下駐車場入り口新設工事に伴う緊急発掘調査- 沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第2集』 沖縄県立埋蔵文化財センター
23. 島袋洋・編 2001: 『天界寺跡(Ⅱ)-首里城公園管理棟新設工事に伴う緊急発掘調査- 沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第8集』 沖縄県立埋蔵文化財センター
24. 金城亀彦・編 1968: 『与那国遺跡-個人農家の畑地改良工事に伴う緊急発掘調査報告- 与那国町文化財調査報告書 第2集』 与那国町教育委員会
25. 西紀章・編 2001: 『ヤツチのガマ カンジン原古島群-奥島かんがい排水事業(カンジン地区)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書- 沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第6集』 沖縄県立埋蔵文化財センター
26. 大城繁・編 1993: 『瀧田古塚跡(1)-奥庁庁舎改築に伴う発掘調査- 沖縄県文化財調査報告書 第111集』 沖縄県教育委員会
27. 安里藤淳 1989: 『与那国遺跡-地帯油管工事に伴う発掘調査概要- 下地町文化財調査報告書 第1集』 下地町教育委員会
28. 宮城弘樹・編 2004: 『南西諸島における沈没船発見の可能性とその基礎的調査-海洋探査博物館からみた海上交通-』 『沖縄埋蔵文化財センター』 沖縄県立埋蔵文化財センター
29. 那覇市企画部市史編纂室 1979: 『那覇市史 資料編2 中の7 那覇の民俗』 那覇市企画部市史編纂室
30. 金城亀彦 1990: 『豊見城城内埋蔵の明代三彩磁器水注』 『文化課紀要 第6号』 沖縄県教育委員会文化課
31. 那覇市豊見城博物館 1998: 『陶磁器に見る大交趾時代の沖縄とアジア』 那覇市豊見城博物館
32. 三杉隆敏・勝原昭二 1998: 『陶磁器染付文様辞典』 柏書房
33. 今井教・長谷部家嗣 1995: 『中国の陶磁 12 日本出土の中国陶器』 平凡社

協力者一覧

企画展「沖縄県内出土の舶載陶磁器展」を開催するにあたりましては、
下記の機関に多大なご協力を賜りました。
ここに記して深く感謝申し上げます。

(五十音順)

柏書房
勝連町教育委員会
京都市埋蔵文化財研究所
熊本県教育委員会
那覇市教育委員会



企画展
沖縄県内出土の舶載陶磁器展

2004年10月発行
編集・発行 沖縄県立埋蔵文化財センター
〒903-0125
沖縄県中頭郡西原町字上原193-7
TEL 098-835-8751
FAX 098-835-8754
<http://www.maizou-okinawa.gr.jp/>

印刷
株式会社 東洋企画印刷
〒900-0024
沖縄県那覇市古波蔵4-1-1
TEL 098-831-7404
FAX 098-831-9958

